

海外赴任が決まりました。 日本人学校、インターナショナル スクール、現地校、どう選べば いいのでしょうか

海外子女教育振興財団
教育アドバイザー

橋本 芳登



<プロフィール> (はしもと よしと)
大阪府の公立小・中学校で教諭、教頭、校長を歴任。大阪府大東市教育委員会指導主事として3年間勤務。1995年の広州日本人学校(中国)創立時に教諭として、2016年からはヨハネスブルグ日本人学校(南アフリカ)に校長として勤務。2019年より海外子女教育振興財団の教育アドバイザーを務めている。

はじめに

海外でお子さんが学ぶ学校は日本人学校かインターナショナルスクール(以下インター校)、あるいは現地校になります。地域によっては必然的に学校が決まってしまうケースもあります。が、選べる場合は学習内容よりも「日本語で学ぶか」「英語や現地語で学ぶか」という言語環

境の違いで迷っていることが多くはないでしょうか。

「せっかくの機会なのでインター校で英語を学ばせたいと思うのですが、日本語も大事です。ので迷っています」という相談も増えていきます。そこで学校を選択するときの参考にしていただければと思います、それぞれの学校の特徴と通わせる際の留意点をお伝えします。

1. 日本人学校の 特徴と留意点

現在、アジアや北米をはじめ世界各地に九十四校の日本人学校があります。義務教育期間だけでなく幼稚部(十七校)や高等部(中国・上海のみ)が併設されているところもあります。また、小学部と中学部の児童生徒数を見ますと二〇〇人以上の大規模校から五十人以下の小規模校まであり、その特色もさまざまです。

日本人学校は現地の日本人会等が主体となつて設立され、日本人会や進出企業の代表者、保護者の代表等からなる学校運営委員会によって運営されています。経費は授業料などの保護者負担金、企業・団体からの寄付金、および日本政府からの援助金によって賄われている公的な性格を持つ私立学校です。

国内の学校と同等の学習指導要領に準じた教育課程を有するため、日本の学校と学習の連続性が保たれ、日本人学校の中学部を卒業する者は国内の中学校を卒業する者と同等以上の学力があると認められます。

指導は「海外の子どもたちの教育活動に携わりたい」というやる気を持った先生たちが日本全国から文部科学省の選考に合格して派遣されるなどして、最新の指導方法で子どもたちを指導します。

日本人学校では、それぞれ設置されている国や地域の環境を



クアラルンプール日本人学校幼稚部 中学生とのZoomでの交流

生かした語学教育（現地語・英語）や現地理解教育を小学校の低学年から行っているところが多くあります。現地の学校や幼稚園等と定期的に交流を持ち互いの文化を紹介し合って国際的な資質を育てるなど貴重な経験をすることになります。

さらに、母語の基礎は九歳で確立し、この基礎があつて初めて日本語で深い思考ができるといわれていますが、海外で、幼児期から母語を年齢相応に学

ぶことができる日本人学校の環境はたいへん貴重といえます。

日本人学校は子どもたちの転入・転出が多く、歓迎会やお別れ会が頻繁に行われます。また通学はスクールバスで行われているのが一般的です。小規模の学校が多いのですが、一クラスの数人が十人以下の場合には授業中に何度も発言する機会があったり、いろいろな係を任せたりすることもあります。

日本国内の一般的な学校とのこのような違いは、帰国後のカルチャーショックにつながるおそれもあり、注意が必要です。

2. 現地校の特徴と留意点

現地校は、その国のよき市民となる人間を育てるための学校で、その国の法律や教育制度のもとで教育が行われ、その国の言語が使用されます。

義務教育期間は国によって異

なり、一般的には九年が多く十一年から十三年という国もあります。

義務教育年齢にあたる子どもへの入学・編入学は、その学区内に正式に居住する手続きをして、その国・地域の居住者としての義務や責任を負う立場が明確になれば許可されます。ただし滞在する国や地域によっては、法律・言語・宗教などの問題から外国人の入学・編入学が認められないケースもあります。

義務教育の期間や学年制度、年度の始まりと終わりの時期や就学基準日は国や地域によって異なるため、外国の現地校に入学・編入学する場合、かならずしも日本と同じ時期に同じ学年になるとは限りません。

逆に日本に帰国して公立の学校に入る場合、義務教育期間中（小学一年から中学三年まで）であれば、海外においてはどの学年であっても、帰国後は年齢相応の小学校・中学校の学年に

編入できます。ただし高校や大学等は義務教育ではありませんから、国内の義務教育修了、あるいは高等学校修了と同等の資格を海外の現地校で得てくる必要があります（インター校も同じ）。

現地校（インター校）へ通う際は日本の学年での基本的な学習内容を理解しておき、帰国したときにまったく授業についていけないということのないようにしておくことが大切です。

特に漢字の学習で困っているという相談が帰国前のかたからよくあります。滞在する都市に補習授業校がある場合には、ぜひ通わせてください。

補習授業校では日本の教科書を使って基礎的な学習が行われていて、日本語でコミュニケーションが取れます。日本の学習に触れられるほか、海外に行つたばかりのお子さんにとっては英語での生活のプレッシャーから解放されホッとできる心のオ

インター校はその国に住むさまざまな国籍の子どものために設置・運営されている学校です。多くは、幼稚園から高校

3. インターナショナル スクールの 特徴と留意点

アシス的な存在になります。滞在する都市に片道二時間以内に補習授業校があれば通わせる価値は十分あると思いますので、ぜひご検討ください。

日本人学校か、あるいは現地校やインター校かと問われた場合、基本的には滞在期間が二年以内ならば日本人学校を選択することを提案しています。これは一般的に生活言語を習得するのにかかる期間が二年間といわれているからです。さらに母語を習得する前のお子さんに対しては、まずは日本人学校で母語を身につけることをお勧めしています。

まで一貫教育を行っています。

インター校では英語をおもな言語とし、用いられる教育課程はアメリカ式、イギリス式、国際式（IB）の教育制度に準拠している場合が多く、なかには複数の教育課程を採用しているところもあります。

インター校では、英語が母語でない子どもたちのためにESL（English as a second language）プログラムが用意されている場合が多いですが、指導内容や指導方法は学校によって異なります。初めて海外の学校で学ぶことになった学齢が高いお子さんにとつて、どの学年まで語学サポートを受けられるかは、インター校を選択する際の重要なポイントになります。

習慣や考え方、行動の仕方が異なる子どもたちと机を並べて勉強することでグローバル人材としての資質や能力を身につけることができると考え、インター校を選択する保護者が増えています。

います。

さまざまな国籍の子どもが在籍しているインター校で友達をつくるには、相手があるがままたに理解し、認め尊重する態度が大切です。このような態度を身につけることにより、国際的視野、国際的判断力等が自然と養われていきます。

インター校へ通う際は学校のステータスを調べる必要があります。その学校を設置した本国の教育に準じたカリキュラム・教師陣を備え、国際的な評価団体の認定を受けているかどうかは在籍中や卒業後の資格がどのようなものになるかを左右します。これはその後の進学等に大きく影響しますので慎重に行ってください。

最近では日本人の進学実績や国際的な認証機関による認定の有無、国際バカロレア（IB）認定校などについてインターネットでも調べられますので参考にされるとういでしょう。

終わりに

海外でのお子さんの学校選択は「滞在期間」「子どもの学年」「子どもの資質（性格、生活習慣、関心、学習能力や意欲等）」「現地の教育事情」「家庭の教育方針」等の観点からご家族でよく話し合ってから決めてください。そして決めたら、選んだ学校での生活や学習に最善を尽くしてください。結果としてどの学校を選択されても、最善を尽くせばお子さんにとって貴重な日々になることは間違いありません。



ロンドン補習授業校 書き初め